様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００６５８

研究課題名（和文）『ロバート・グロスターの年代記』現存写本研究：よりよい原典批判のために

研究課題名（英文）A Textual Study of the Chronicle of Robert of Gloucester

研究代表者
狩野　晃一（Kano, Koichi）

明治大学・農学部・専任准教授

研究者番号：９０７３５６４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：中世イギリスで書かれた韻文年代記である『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』（c. 1300）は大きく分けて二つの写本系統に別れており、それぞれに複数の写本が存在する。この作品を研究する際、未だに19世紀にA. Wrightによって校訂された版に頼っている。より多くの写本情報を入れた新たな校訂版を作成するために、写本ごとに正確な転写を行い、それぞれに対応する行をパラレルに並べたテクストの作成を進めた。これにより語彙や統語の比較研究が容易となり、校訂版作成時に詳細な写本間の異同に関する記述を可能にする土台を形成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究ではながらく等閑視されてきた『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』に再び光を当てた。現存する写本テクストを忠実に転写し、パラレル・テクスト化することで、間テクスト比較研究の土台を作った。詳細な語彙、統語の比較が可能となり、新たな校訂版の作成に進むことができ、完成の暁には本作品及び周辺作品研究の進展が期待される。本年代記が典拠とした『ブリタニア列王史』などラテン語作品との比較に関するケーススターディでは、原典の翻訳や取り入れ方に注目し、年代記作家が内容を改変することなく散文原典を中英語韻文に変える技術があることを明らかにした。これにより原典受容の様相、文学的再評価につながるものと考える。

研究成果の概要（英文）：The Chronicle of Robert of Gloucester, a metrical chronicle written in medieval England, has two different manuscript groups. Unfortunately, we still have to depend on the longstanding edition which was edited by A. Wright in the nineteenth century when this work is examined and referred to. In order to produce reliable new edition with adequate information of the extant manuscripts, I have processed accurate transcription of each manuscript and made a parallel-text. This makes the groundwork for the comprehensive intertextual comparison to the realization of a new critical edition of the Chronicle.

研究分野：中世英語英文学

キーワード：中英語　ロバート・オヴ・グロスターの年代記　写本　典拠研究　パラレル・テクスト　比較研究　年代記

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

13 世紀初頭に英国グロスタシャー付近で書かれたとされる『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』（作者不詳：以下『年代記』という）という年代記は、19 世紀末に A. Wright によって校訂本が出されて以来、学術的校訂版は出版されてこなかった。そこで新たな校訂版の必要性を感じ、現存する写本情報を全て収集し、新たな学術的刊本を作成すべき時期に来ていると考えた。

本研究は、より精密なテクストを整備し提供すること、そしてその過程で得られる各写字生の異綴りや写字行動のデータを蓄積していくことで言語研究、原典批評、文学研究および歴史研究に資するものであり、特に日本では年代記はあまり触れられない分野であることから、言語・文学研究の面からも本研究の意義は大きいと考えた。

２．研究の目的

本研究で扱う『ロバート・グロスターの年代記』は約 12,000 行の韻文からなる年代記で、複数の写本が残されている。現在の文学的な評価は低いものの、史料としての価値は高い。アーサー王伝説、そしてその他初期イングランドの歴史記述部分については『ブリタニア列王史』から採られたとされている。現在入手できる版は 1 世紀以上も前のもので、言語研究を進めるには十分なものとは言えない。そこで複数写本が現存していることを利用して行対応のパラレル・テクストを作成し、写本間での綴り字、統語、語彙選択などの差異を厳密に検討する。言語・文学研究に資する新たなテクストの作成と、比較による検証から原著者の意図したテクストに近づくとともに、写本制作に携わった写字生らの写字行動に光をあて、『年代記』の主要な研究者である A. Hudson の研究を補完する目的もある。

３．研究の方法

申請者は中英語方言を綴り字と発音の関係、語彙の使用、句読点などの観点から 研究してきた。その際にパラレル・テクストを利用し、一目で比較対照を行えるこの手法は 非常に有効であった。本研究で主眼を置くのは、同一作品の通時的・方言的な言語変化である。幸い 14 世紀初頭の写本を含め 16 世紀までの複数の写本が残っているため、綴り字や押韻の様子から音韻の発達、また時代・方言・写字生などの要因が語彙選択に影響する度合い、写本による歴史的事実の取捨選択など、こういった変化が果たしてある程度組織的に現れるかどうかを検証する。

上述の研究を進めるとともに、その成果を『年代記』の内容の検証に用いたいと考えている。例えば『年代記』中のアーサー王伝説部分はその多くをモンマスの『ブリタニア列王史』に負っていると言われているが、具体的には、それを『年代記』の作者がどのように受容したのか、そしていかに「翻訳」したのかということについて、この作品の持つ年代記としての位置を再確認する。

４．研究成果

最初に行ったのは first version のテクスト写本画像の収集で、それに少し遅れて second version の収集を始めた。写本画像及び、各写本収蔵先のカタログ等を参照しつつ、写本に付された蔵書票や遊び紙などにある書き入れをもとに現存写本の記述及び所有者等の来歴について調査し、その概略を示した。それは「『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究（１）－現存写本とその来歴－」（2018/12）にまとめられている。

ついでテクストのデータの元となる写本画像から、順次テクストの転写作業を行った。転写テクストの一部を公開したのが、「『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究（２）－British Library, Additional MS 50848－」（2019/03）である。同時に現在まで邦訳のない本年代記について、「『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究(5) －中英語原典の翻訳（ll. 1-507)」（2020/09）及び「『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究(6)-中英語原典の翻訳（ll. 508-914)」(2020/12)で一部を訳出した。

集まってきたテクストデータをもとにパラレル・テクストを作成した。『年代記』の冒頭部分についてパラレル・テクストの分析を行い、語彙や統語、翻訳の検討から典拠作品と本年代記の関係について「『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究（3） -典拠作品の使用をめぐって-」（2019/09）で扱った。ここでは、年代記作家がラテン語散文原典の内容を損なうことなく、凡庸な脚韻が多く見られるものの、初期中英語の韻文に変換する確かな詩作の技術があることを示した。俗語典拠（主に Anglo-Saxon Chronicle）の使用については、「『ロバート・オヴ・グ

ロスターの年代記』における俗語典拠の使用」（日本中世英語英文学会第 39 回全国大会，2023/12）で口頭発表を行い、ラテン語以外の典拠を用いるときの年代記作家の歴史的記述の取得方法についての一端を明らかにした。

また、本科研費プロジェクトの概要等について周知活動としては、国内研究会では「The Chronicle of Robert of Gloucester の新たな校訂版にむけて」（第 107 回チョーサー研究会研究発表会、2019/11）において、また海外学会で「Towards a new edition of the Chronicle of Robert of Gloucester: Building a parallel text version, its role and impact」（The History of English Language in Poznan biannual conference (HEL-P) 2019），2019/11)と題して発表を行い、主に、本研究の目的、方法論等をパラレル・テクストの実例を用いて説明し、このパラレル・テクストの完成によってどのような研究が可能となるか、そしてその結果、新たな校訂本へと繋がっていくかという、本邦のみならず海外の中世英文学、英語史、歴史言語学の研究者らにアピールをした。

パラレル・テクストのウェブ公開（許可があれば電子テクストと写本画像を合わせた形で）は今後、フォーマット等細部を整えて順次行っていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 Koichi Kano	４．巻 -
２．論文標題 The Use of Sources and Art of Composition in the Chronicle of Robert of Gloucester	５．発行年 2024年
３．雑誌名 The Lifespan of Medieval English Literature, 900-1550	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 狩野晃一	４．巻 548
２．論文標題 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究（5)－中英語原典の翻訳（ll．1-507）－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 明治大学教養論集	６．最初と最後の頁 61-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 狩野晃一	４．巻 550
２．論文標題 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究（6)－中英語原典の翻訳（ll．508-914）－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 明治大学教養論集	６．最初と最後の頁 161-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 狩野晃一	４．巻 542
２．論文標題 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究（3）　－典拠作品の使用をめぐって－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 明治大学教養論集	６．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 狩野晃一	4．巻 544
2．論文標題 ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究（4） ―British Library, Additional MS 18631（ff. 4r-8v）―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 明治大学教養論集	6．最初と最後の頁 297-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 狩野晃一	4．巻 536
2．論文標題 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究(1)ー現存写本とその来歴ー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 明治大学教養論集	6．最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 狩野晃一	4．巻 537
2．論文標題 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究(2)ーBritish Library, MS Additional 50848ー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 明治大学教養論集	6．最初と最後の頁 189-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 狩野晃一	4．巻 578
2．論文標題 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』研究(7)ー俗語典拠の使用について	5．発行年 2024年
3．雑誌名 明治大学教養論集	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Koichi KANO
2．発表標題 The Use of Sources and the Art of Composition in the Chronicle of Robert of Gloucester
3．学会等名 31st International Conference of SELIM, the Spanish Society for Medieval English Language and Literature（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Koichi KANO
2．発表標題 Towards a new edition of the Chronicle of Robert of Gloucester: Building a parallel text version, its role and impact
3．学会等名 HEL-P 2019, The History of English Language in Poznan; biannual conference（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 狩野晃一
2．発表標題 The Chronicle of Robert of Gloucesterの新たな校訂版にむけて
3．学会等名 第107回　チョーサー 研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 狩野晃一
2．発表標題 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』における典拠翻訳
3．学会等名 日本中世英語英文学会　第35回全国大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 狩野晃一
２．発表標題 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』における俗語典拠の使用
３．学会等名 日本中世英語英文学会　第39回全国大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	遠山　茂樹 (Toyama Shigeki)		元東北公益分科大学教授

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関